



Data

監督・脚本: ローランド・クリック

出演: マリオ・アドルフ/アンソニー・ドーソン/マルクヴァルト・ボーム/マーシャ・ラベン/ベティ・シーガル

👁️👁️ みどころ

「アメリカン・ニューシネマ」の名作はたくさん観たが、「ニュー・ジャーマン・シネマ」はほとんど観ていない。しかし、カンヌ国際映画祭からオファーを受けながら、「ニュー・ジャーマン・シネマ」を貶めるものだと反対された、ローランド・クリック監督の本作は一体何？

『荒野の用心棒』（64年）を代表とする「マカロニ・ウェスタン」の登場に全世界は湧いたが、ドイツ製の西部劇とは？なぜ本作は「ニュー・ジャーマン・シネマの栄光に背を向け、闇に葬られた伝説のカルト映画」なの？

「映画は感じるもの！想像するもの！したがって、説明は不要！」。ローランド・クリック監督の、そんな“信じがたい冒険”を実現させた本作の功罪はその好き嫌いは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ニュー・ジャーマン・シネマとは？本作はその代表作？■□■

私は高校1年生の時に『荒野の用心棒』（64年）や『夕陽のガンマン』（65年）を観て、「マカロニ・ウェスタン」の魅力にぞっこんになったが、ドイツ映画に西部劇があることは知らなかった。

チラシには、本作の舞台は「“アメリカ”のどこか・・・」。そして、物語は「砂漠の中の寒村で、100万ドルの札束を奪い合う男たち、白日の下に乳房をさらけ出す狂女、口をきけない美少女、謎の行商人と非情な鉄道員・・・登場人物わずか7人が灼熱の荒野に繰り広げる非情の饗宴。」と書かれている。なるほど、なるほど。

私は2007年に映画検定3級に合格しているから、『映画検定公式テキストブック』の「第4章 映画の用語集」の「作風・手法・時代」の項目に解説されている、「ニュー・ジャーマン・シネマ」のことをよく知っている。これは、「アメリカン・ニューシネマ」、「ヌ

ーヴェル・ヴァーグ]、「ネオ・レアリズム」等と対比されるものだ。そして、本作はその「ニュー・ジャーマン・シネマ」の代表作の1つ。てっきりそう思ったが・・・？

■□■監督に注目！なぜ闇に葬られた伝説のカルト映画に？■□■

どの時代でも、どの社会でも、“変わり者”はいるもの。芸術や映画の世界では、それがとりわけ顕著だから、鬼才・異才とよばれる映画監督は各国に存在する。さしずめ、日本なら園子温監督、韓国なら2020年12月1日に亡くなったキム・ギドク監督がその代表(?)だが、「ニュー・ジャーマン・シネマ」が勃興していた1960年代のドイツにおけるそれが、本作を監督・脚本・製作したローランド・クリックらしい。同監督の長編第2作となる本作は、「ニュー・ジャーマン・シネマの栄光に背を向け、闇に葬られた伝説のカルト映画」と言われているそうだから、ビックリ！それは一体なぜ？

本作は、1970年のカンヌ映画祭からコンペティション出品オファーを受けたものの、ドイツ国内の監督や批評家から、映画が商業的すぎて、当時勃興していたニュー・ジャーマン・シネマを貶めるものだと出品を反対され、特別上映という形になった。ところが、上映当日はあいにくの雨で観客はごく少数、それがかえってその後の本作の“カルト化”に拍車をかけることになった。しかし、ドイツ国内では興行的に成功し、ドイツ映画賞長編作品賞に選出されたそうだ。また、ローランド・クリック監督は、ファスビンダー、ヘルツォーク、ヴェンダース、シュレンドルフらニュー・ジャーマン・シネマの代表とされた監督たちと同世代でありながら、徒党を組むことを拒み、栄光に背を向けて独自の世界を追い求めた“ドイツ映画の孤狼”らしい。なるほど、なるほど。しかして、本作はどんな西部劇？

■□■舞台は？監督の狙いは？字幕は？■□■

本作冒頭、ニュー・ジャーマン・シネマを代表する俳優の1人で、その特徴ある風貌から「ドイツのジャン＝ポール・ベルモンド」と呼ばれたマルクヴァルト・ボーム演じる男、キッドが1人荒野を彷徨うかのように逃げていく風景が描かれる。左腕に銃弾の跡がある彼は、大きなジュラルミン製のトランクを大事そうに抱えていたが、歩くのも限界状態で、ぶっ倒れてしまうことに。他方、轟音を響かせながら走ってきたおんぼろトラックがいったん止まり、バックしたのは、道端に倒れているこの男を発見したためだ。しかして、ここではどんなハプニングが・・・？

本作のパンフレットには、「それは信じがたい冒険だった」と題するローラント・クリック監督のインタビュー(『デッドロック』撮影秘話)がある。そこではまず、「あなたの映画はドイツらしくないと言われますね？」との質問に、監督が答えているが、その要点は「映画は感じるもの！想像するもの！したがって、説明は不要！」というものだ。続いて彼は、「『デッドロック』はとても冒険的な映画ですね」、「映画への助成についてどう思いますか？」、「『デッドロック』が作られたのは、ニュージャーマン・シネマの勃興期にあたりますね」、「『いったい、何があなたを惹きつけたのですか？』との質問にも次々と答えて

いるが、それはいかにもドイツ人的な(?)理論立った説明で一貫しているから、こりゃ必読。

さらに興味深いのは、本作のパンフレットに、日本語字幕を担当した小泉真祐氏の『デッドロック』翻訳にあたって」があり、すべての字幕が掲載されていること。脚本が掲載されているパンフレットは時々あるが、字幕がすべて掲載されているパンフレットを見るのは本作がはじめてだ。それを見てわかることは、本作は如何にセリフが少ないかということ。それなら、字幕制作作業は楽だったの?そう思えなくもないが、さて、その実態は?

■□■登場人物は?物語は?ストーリーの説得力は?■□■

本作のチラシによると、本作の物語は前述のとおり簡潔なもの。もっとも、登場人物7名と言っても、謎の行商人と非情な鉄道員はチョイ役だし、2人の女もストーリーに花を添えるだけ(?)だから、実質的なストーリーは、①ジュラルミン製のトランクを持って、息も絶え絶えに歩く冒頭の男キッド、②閉鎖された鉱山(デッドロック)の監督官ダム(マリオ・アドルフ)、そして、③中盤から登場してくるキッドの仲間である非情な殺し屋のサンシャイン(アンソニー・ドーソン)、の3人で展開していくことになる。

三船敏郎、アラン・ドロン、チャールズ・ブロンソンという世界の3大俳優が共演した『レッド・サン』(71年)は奇妙な映画だったが、メチャ面白かった。それと同じように(?)、本作のストーリーは、ジュラルミン製のトランクに入った100万ドルの争奪戦だが、そのストーリーにあまりリアリティが感じられないのが大きな特徴だ。ダムは、銃をキッドから奪った上、キッドは最初から死にかけているのだから、そもそもキッドを殺して100万ドルを奪ってしまえば、それでストーリーは終わり。しかし、それでは物語が成立しないから、本作導入部では、キッドとダムの間で分かったような、分からないようなやり取りが……。中盤から、キッドがサンシャインと喧いていた男が登場してくるが、この男の性格もよくつかめない。彼は、モーゼル C96の使い手だから、ダムを始末しようと思えばいつでも可能。それなのに、なぜ本作中盤でも、分かったような、分からないような、見方によってはイライラする(?)展開になるの?

さらに、結局ダムを殺してしまった後は、それまで互いに信頼関係にあったキッドとサンシャインとの2人の対決になるが、これまた何とも意外な結末に!『レッド・サン』の場合は意外性を尊重しつつも、ストーリーのリアリティや説得力が十分だったが、本作はそれが全くないのが大きな特徴だ。そもそも、100万ドルの入ったジュラルミン製トランクを、誰がどこに隠しておくのかについての描写がどこにもないうえ、3人の男たちは「いつでも殺してくれ」という姿勢が顕著だから、ワケが分からない。そんな本作の面白さ(?)を、あなたはどうか受け止める?

■□■音楽は?SPレコードは?美少女は?好き嫌いは?■□■

私の中高校から大学時代、そして弁護士5年目頃まではレコードの時代だったが、次第にカセットテープ、MD、そしてCDの時代に入っていった。ビデオテープも発売当初は

奇跡的な商品だったが、VHS方式とβ方式との長い間の“対決”を経て、今や両者とも消滅してしまった。そんな経緯の中で本作を観ると、ジュラルミン製トランクの中に、なぜ100万ドルの他、1枚のSPレコードが入っているの？誰しもそんな疑問を持つはずだ。

クリント・イーストウッドが主演した“マカロニ・ウェスタン”の出発点たる『荒野の用心棒』（64年）は、エンニオ・モリコーネの音楽「さすらいの口笛」とともに大ヒットしたが、「ニュー・ジャーマン・シネマ」たる本作では、冒頭、いわゆるクラウトロック（60～70年代ドイツのプロGRESSIV・ロックの代表格であるCAN（カン）のサイケデリックなサウンドトラックが鳴り響くので、それに注目！

他方、本作を鑑賞した人の中には、予告編で見た美少女ジェシー（マーシャ・ラベン）の姿を見たいから、という人もいるはずだ。荒れ果てたデッドロックには、監督官のダムその他、狂女コリンナ（ベティ・シーガル）が住んでいたが、ひょっとして、口のきけないこの美少女はあの太っちょお婆さんの娘？それを説明しないのもローランド・クリック監督流だが、この娘は一体何を求めているの？ひょっとして、どこかに彼女のラブシーン（ベッドシーン）が登場するの？そして、3人の男たちの“対決”の中、この美少女の運命は？

『荒野の用心棒』は主人公の生きざまが明確だったうえ、主人公の復讐劇の在り方が明確な“テーマ”になっていたが、本作は何が“テーマ”かよくわからない“混沌さ”が“テーマ”。そんなメインストーリーをしっかりと踏まえながらも、CAN（カン）の音楽をしっかりと味わい、また、サブストーリーとしてそんな美少女の運命にも注目したい！

2021（令和3）年8月4日記